
少年のおだやかな日々

春世

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

少年のおだやかな日々

【Nコード】

N9054E

【作者名】

春世

【あらすじ】

普通の不良・木下京介キノシタキョウスケの学校にやってきた、転入生・村神葵ムラカミアオイはどこか変な男子生徒。でも一応、成績優秀・容姿端麗・性格品行な完璧人間。この、キャラが真逆な2人を巡って起こる数々の事件！この2人なら事件を解決できる…！？

1日目：コンピ誕生！？

俺は気付かなかった。

今までの日々が、おだやかすぎたという事に…

- 少年のおだやかな日々 -

俺は木下京介。^{キノシタ キョウスケ}16歳、高1。身長179cm、体重68kg。黒髪で左眼に眼帯をしている。制服は前開け、ワイシャツもほとんどのボタンを開けている。いわゆる不良という奴だ。

学校にもあまり行っていない。

今日だって学校に行くのは一週間ぶりくらいだ。とか言っつて、俺が久しぶりに学校に行くと、俺達とは正反対の奴ら…一般に優等生と呼ばれる奴らがビビッてソワソワしやがる。

あっちは怖がっているのかもしれんが、俺としてはムカつくだけだ。そっぴい先週、ウチのクラスに転入生が来たって聞いたな。なんかスゴいイケメンだから、ちよっと思いい知らせなきゃなー、とかクラスメートの不良共が騒いでやがったが……。

フン。馬鹿馬鹿しい。そんなことやってるヒマあるなら、体でも鍛えろってんだ。最近の不良共はみんな腑抜けちまった。ただ何となく不良やってます！みたいな顔しやがって…。

まあ、いい。今日、俺が学校に行くのもその転入生が、顔は普通に
イイんだが、なんか変な奴だって噂になっているから、ソレを確か
めに行く為だしな。

ガラッ

教室のドアを開ける。

「あれ、ずいぶん早いですね。日直ですか？」

女みたいに高い声音が教室の奥から聞こえた。

顔を上げると、そこには噂通りのイケメンの男がいた。だが、なんだ？この違和感は…。自分でもよく分からない。目の前にいる奴は、別に普通だ。でも確実に何かが違う。噂はこの事なんだろうか……。

「木下さん？どうしました？ボーツとして…」

いきなりソイツが俺の顔を覗き込んできた。…まただ。さっきよりも強い違和感がある。近づけば近づくほど、違和感は強くなるらしい。

「いや。何でもない…。そういえば、お前が噂の転入生か？先週来たっていう…」

「アレ、知っていて下さったとは光栄ですね。そんなに有名ですか、僕？ところで噂って何の事ですか？」と、ソイツは首を傾げる。男なのに何故かそのポーズが似合っていた。微妙にウザい。

「知ってたと言っても、名前は知らないがな。というかお前、本当に噂知らないのか？」

「はい。さっぱりですね、残念ですけど。君は知ってるんですか？ムカツク程似合っている笑顔で、俺に問い掛ける。さっきまで気付かなかったが、コイツ、すごい女顔だな…。さっきの違和感はこのから来てんのかもな。」

「ああ。俺も小耳に挟んだだけだな。お前、顔はイイが変人って噂されてるぞ。…というか、名前は？」

俺が気がついたように言うと、ソイツは一瞬キョトンとして、ああ！みたいな顔しやがった。

「あ、すみません。君が親しい人のように話してくれるので、つい名前も知っているものと思いこん、」「いいから早く言え」

するとソイツは口に手を添えて苦笑した。

「ごめんなさい。では、改めて。…初めまして。村神葵ムラカミ アオイです、どうぞよろしく」と言って、また微笑を俺に向けた。

「じゃ、俺も改めて聞くが村神。…なんでお前、俺の名前を知っているだ?」「じゃあ僕も逆に質問しますけど、どうして僕が君の名前を知っている、と言い切れるんですか?」

なんだ、コイツ。自分が言ったこと忘れてるのか?

「お前、さっき俺がボーツとしてたとき話しかけただろうが」「はい、確かに」「そんとき、俺の名前言ってたじゃないか。忘れたのか」

すると村神は面白そうに顔を歪めてクスクスと笑い出した。

「……何がおかしい」俺が低い声で呻くように言うと、村神は「すみません。しかし君も面白い人ですね。普通ならば気にしない、というより自己納得すると思いますけど。あ、別に悪口を言っている訳じゃありませんよ?」「悪かったな、普通じゃなくて。で、なんで名前知ってるだ。まあ、どうせ名簿を見て、一番出席日数少なかったのが俺だったから目に留まった…とか、そんなところだろ」

「違いますよ。そもそも名簿なんて見ないですし」「じゃあ、なんでだ」

村神はマツクの0円スマイルのような笑顔を見せて言った。

「クラス的女子が教えてくれたんですよ。キミのことを憶れるよう

な感じで嬉しそうに話してましたよ。幼馴染か何かですか？それとも……」

ムカつく笑顔で顔を歪ませながら、楽しそうに右手の小指を立てて、村神は行った。

「かの、」「その右手、腕から引きちぎるぞ」

俺は村神が言い終わる前に言った。

「そうですか、なら良かったです。もし君があの人のお氏だったら、何か対処をしなくてはいけなくなりますから……」「なんで対処する必要があるんだ。お前、その女のこと好きなのか？」

村神は困ったような笑顔を作って、手をヒラヒラと左右に振った。

「いえいえ、それは無いですよ。つい二週間程前に会った人を、そう簡単に好きにはならないでしょ？一目惚れか、運命の赤い糸か何かで小指が繋がっているのならば、話は別ですけど。ね」

と言って、また小指を立てた。それと、本気で小指へし折るぞ。

「じゃあ、なんだ。……お前：まさか、ホモ、」「断じて違います。変な想像しないでもらえませんか？僕だって怒りますよ？」

まったく！と言って、村神はゴホン、と咳払いをした。

「…すみません。取り乱しました…」「…いや、今の、取り乱したのか？じゃあお前、その女のこと好きじゃないんだな？」

村神は、はい、と頷いた。

「それに、ホモでもないんだろう？」「……はい。そうですね…」
と、怒りマークを額に浮かべながら右手にこぶしを作り、震わせながらニツコリ笑顔で肯定した。

「じゃあ、なんで何か対処しなきゃならないんだ？というか一体何の対処だ」

村神は少し悩むような格好をしてから、俺の方を見た。

「教えてもかまいませんが、その代わり、一つ条件があります。いいですか？」「は？何だ、条件って。友達になれ、とか言つつもりか？」

また村神はハハハと笑って、否定するように困った笑顔を作った。

「いえいえ、そんなんじゃないですよ。ただ、協力してほしいんです。……君に」

村神が、真剣な眼差しを俺に向けた。コイツの瞳に一瞬だが、一筋の光が走ったような気がした。

「協力？何に？」

村神は薄笑いを浮かべて、目をつぶった。そしてもう一度目を開けて、さっきとは比べ物にならないほどの光を灯した目で俺に言った。

「潜入捜査です」

2日目：最終的にmaking club

第2日目：最終的にmaking club

「潜入捜査？ケーサツか、お前は」「クールなツツコミありがとうございます。でも、これは別にジョークでもなんでもありません。私はケーサツです」

しばし、2人の間に沈黙が流れた。

「イヤ、だから、もういいって。ソレ、今の時代流行らないから手をヒラヒラと横に振る。」

すると村神も、手を横に振り、「イヤ、だからジョークじゃないですって。ホラ、一人称も『私』に変わってるでしょ？」「イヤ、ホント流行らないから、ソレ。アレだろ？お前、俺が騙されやすそうとか思っているんだろう？甘いな。俺だってソコまで馬鹿じゃない」

「いや、だから真面目にですって。キミが馬鹿だろうが、天才だろうが知りませんよ。ただ協力して欲しいんですよ。悪いようにはしませんから」

しばらく京介は、考え込むような顔をして、言った。

「じゃあ、証拠見せるよ。証拠」「証拠?」「ああ。俺が納得できるような証拠を見せれば、協力してやらんこともない」

すると、今度は村神が考え込むような顔をした。

しばらく目を伏せ、再び目を開ける。「分かりました。じゃあ証拠見せますから、その代わり、絶対信じてくださいね?」「いや、信じられんから証拠見せろと言ってるのに、それじゃ意味ないだろうが……」「まあ、細かいことは気にしないで行きましょう!」「……(それは言っではダメだろう、警察として!そういう事を言うから信じられないんだ……)」

そう言いながら村上が取り出したのは、ドラマなどでよく目にする

警察手帳だった。

「…………」「ね？これで信じてくれたでしょう？」「…………これ…偽物だよな…………？」「見せられた手帳を青ざめながら持ち、京介は村神に聞く。なぜなら、そこに記されていた文字は…………」

「失礼な…。本物ですよ。なんなら今から警視庁に行ってくださいってもかまいませんよ？」

怖くて行けるわけないだろう、バカ！！

そこに記されていた文字は…………

警視庁特殊部隊《SAC》隊長兼司令補佐長官・村神葵

その日の放課後、京介と村神は学校の中庭にいた。

「…で、信じていただけましたか？授業中どころか、昼休みもずつと負のオーラが出てましたけど。大丈夫ですか？」「……ああ、なんとかな…。まあ…百歩譲って、お前が警察のお偉いさんだということは信じよう。だが！お前が潜入捜査しているとはどうも思えん。一体どんな捜査をしてるんだ？」

「人探しです」「あ、悪い。俺、今日補習あるんだった。もう行く」「待ちなさい。キミの成績はトップクラスのはずですが…。というか、早とちりしないでくださいよ。人探しというのは表向きな話です」

京介は怪訝な顔をする。そして深く溜息をつく、ベンチに腰掛け、村神にも座るよう促がした。

「では、失礼します。で、座ったということは信じてくれた、ととっていいんですね？」「ああ、一応な。それで？本当は何なんだ？」

「……場所を変えませんか？ここでは盗聴される危険があるので……」
妙に警察らしいことを言う、と京介は思った。あ、警察だったか。

……いや、いくらなんでもコレはやりすぎじゃないか？村神……

数分後、村神と京介がいたのは警視庁の正面玄関だった。

「で、ここまでして盗聴されたくない本当の捜査の内容って何なんだよ？」「ここまでして、というか、どんな捜査の内容でも警察は秘密主義を貫き通します。まあ、それはさておいて、捜査の内容は、重要人物の回収と……学校周辺の調査です。キミには学校内外の危

危険箇所の確認、及び学校の噂や、裏の情報などを集めて下さい。ですが、最優先項目は学校内外の危険箇所の確認です。学校の噂や裏の情報は余裕があれば、で構いません。いいですか？」

「……」「えーと…大丈夫ですか？私の言ったこと、分かりました？」京介はキョトンとした顔をして、しばらく黙っていたが、少しして口を開いた。「…お前、ホントに警察だったんだな」

* * * * *
* * * * *

「と、まあ、そうは言ったものの、たった2人で行動するのは心細いですね。しかも別々の捜査をするとなると、1人で行動することが多くなるでしょう。ですから、いつその事部活でも作っちゃいましょう！」

「論理が飛躍しすぎて分からん。だいたいな、部活作るつつても人数なんてそう簡単に集まるもんじゃないぞ。サッカーとか野球とか、そういうレギュラーな部活なら活動内容とか分かりやすいから集まるかもしれんが、まさか本物の警察の捜査手伝わさせられる部活なんか誰が入るか！」

すると村神はふう、と溜息をつき、笑顔で京介にこう言った。

「ならキミは入らないんですか？」

ああ、もう諦めた方が賢明だな。俺がいくら拒否しようと、最終的には自分の都合のいい様にしてくせに。

京介はそう思い、苦笑いをして村神とは違う溜息をついた。

「では、木下さん。キミの仕事に部員の収集も加えます」「いや、それは全力で拒否する」

3日目：カオス（前編）

3日目：カオス（前編）

「そういえば、この学校って同好会や部活多いですね。そんなに簡単に作れるものなんですか？」

村神は、隣を歩いていた京介に聞いた。

「ああ…ここは同好会とか部活の規制が緩いからな。3人集まれば同好会、5人集まれば部活として成立するから……ってお前、知らなかったのか！」「知りませんでしたが何か？」

「いや、何で開き直ってるんだよ…」「だいたい私は、最初から部活を作るうなどとは思っていませんでした。やろうと思えば、私1人でも捜査くらいできます」

腕を組み、仁王立ちになりながら偉そうな話す村神を見て、京介は、はあ、と深い溜息をついた。

「じゃあ、何で俺に協力させようとしてるんだ。1人でも捜査できるんだろ？」「…キミが戦力になりそうだったからです。仲間は多い方がいい、とよく言うでしょう」「俺は何の知識もない、ただの凡人だけだな。そんな奴と、よく捜査しようと思ったもんだ」

「……本当は」「む？なんか言ったか」村神の発した声は、あまりにも小さく、京介の耳には届かなかった。

「あつ、いえ。何も……」「？そうか……」

だったら、何でそんな顔するんだ。

その悲しそうな顔の理由を、京介はあえて聞かないことにした。

「それで、何人くらい集めればいいんだ？5、6人か？」

HRが終わってすぐ、村神と京介は廃部寸前になっているボランティア同好会の部室に来ていた。

「そうですね…。同好会は3人で成立するんでしょう？なら、ま
ずは3人を目標にしましょう。人数は多すぎても、少なすぎても行
動しづらいです。つまり、私とキミを含めて、あと1人。とりあえ
ず、1人連れて来てください」

「ずいぶん軽いノルマだな。で？何時までに集めればいいんだ？」
村神は時計を見て、髪の毛を指に絡めた。

「じゃあ、5時にしましょう。私は私の仕事をしていますから、5
時にまたここに」「わかった」

「軽いノルマ、か…。言った俺がバカだった…」

考えてみれば、ほとんど学校に来ていない京介に友人などがいるはずもなく、村神と別れてからすでに30分が経過していた。

「誰か強引に連れて行くか…。というか、こういう仕事なら村神アイツの方が得意じゃないのか？」

そう呟きながら廊下を歩いていると、反対側から1人の女子生徒が歩いてきた。その女子生徒は京介を見るなり、探していた人を見つけたかの様な顔をして、「あっ」と廊下に響きわたるような声を出した。

その声を至近距離で聞いた京介は肩を一瞬強張らせ、その女子生徒に向かって怒鳴った。

「な、何だ、いきなり大声出しやがって！鼓膜が破れでもしたらどうし、」「あんた、『木下京介』でしょっ！？あたし、ずっとあんたに会いたかったのよっ。よくも村神長官の隣の座を奪いやがったわね！この眼帯野郎っ！」

子供のような純粋な目をして、今の京介には分けてほしいぐらいのハイテンションと早口でその女子生徒は言った。

コイツ、今何だった？俺の名前を知ってる？村神長官って村神のこ
とだよな？身内って…警察……だよな…？
眉間にシワを寄せながら、京介は見下すような目でその女子生徒を
見つめた。

「で、お前は一体何者なんだ？ただの生徒じゃないだろう？」と、

京介が話しているにも関わらず、その女子生徒は購買で買ったであろうカツサンドを食べながら、携帯型のゲームをしていた。

「おい……。お前、親から人の話の聞き方を習わなかったのか。というか何だ、そのカツサンドの量は。何人分だ、それ。女の食う量じゃないだろ。おい、聞いてるのか？おいっ。おい！」

「はいはい。聞いてるわよ。あたしは、」そこまで言いかけて、その女子生徒は一瞬言葉を切った。それが後ろから振り下ろされたチョップが脳天にヒットしたからだ、ということに京介が気付くのに時間はかからなかった。

「すみません、木下さん。私の部下が無礼を働いてしまい……。部下は指導しておきます。どうか大目にみてやって下さい。ほら、お前も謝れ。本田」

コイツ、部下とかに対してはくだけた口調で話すんだな。まあ、それが普通か。

村神に促され、本田と呼ばれた女子生徒はしぶしぶ謝った。

「…悪かったわ。でっ、でも長官っ。あたしだってまさか、こんな所で「身内」に会うなんて思わな、」「あ、そうだ。木下さん。まだ本田の紹介してませんよね？」

不自然に途切れた言葉を気にしながらも、京介は村神の問いかけに答えることにした。

「ああ、まだだ。本田っていうのか？ソイツ」「ええ、私の部下で、^{ホンダ ユツキ}本田癒月といえます。地位は警視庁特殊部隊第1班班長です。どうぞ仲良くしてやって下さい」

「よろしくね、キョン介。じゃ、改めて、自己紹介するわっ」「いや、もういい。というか何だキョン介って、」「あたしは本田癒月よ。会ったからには、これから一緒に行動することも多くなると思っけど、足引張るんじゃないわよっ。いい？あたしは高校生で警視庁特殊部隊の第1班班長なのよ？あんたみたいな凡人なんか、全然戦力にもならないんだからね。勘違いしないでよ。長官があんたをパートナーに選んだのは、あんたの瞬発力がいいって見えただけ

なんだからねっ。ホントはあたしが長官のパートナーになるはずだったのに、あんたのせいで台無しよっ。言うなれば、あんたはあたしの代役ってとこね。いいわねっ？くれぐれもあたしの代役に見合っただ働きをしてちょうだい」

「こらっ、本田！年上の人に向かってなんて事をつ。まったくお前は。いい加減、年上に敬語を使えっ。しかもついさっき出たキャラなのに、何でセリフこんなに長いのっ！？」

「それはどうでもいいが、どうするんだ？これから。お前と一緒に捜査するのか？」京介が聞くと、本田は目を輝かせ「そうねっ、それがいいわっ。長官と一緒にお仕事できるなんて、光栄ですっ。ちようか、」高いソプラノの声で話すが、それを村神が遮った。

「すみません、本田には別の仕事があるので。あ、それと申し訳無いです、部員は本田でよろしいですか？」「え、あ、ああ。別にかまわんが…」

本田は納得のいかないような表情をしていたが、村神の指示に従った。

その後、本田と村神は一度警視庁に戻るため、今日の捜査はここま
でとなった。

警視庁までの帰り道、村神は本田の数歩前を歩いていた。

「…あの、長官っ」「なんだ？」「なんで嘔吐いたんですか？」村
神は歩調を変えず、淡々と歩く。

「意味が分からない。変なこと言わないでくれるか」「だ、だって
…っ、あたしは元々長官とコンビ組んで、一緒に捜査するはずだっ
たじゃないですかっ！それなのに、どうしてあんな奴とコンビ組ん
で、あたしには別の仕事があるなんて嘔吐いたんですか！？」

「適性を判断した結果だ」

本田の言葉に何一つ興味が無いかのように、村神は歩調を変えず、
振り返りすらしない。

だが「…なんで、自分にも嘔吐くんですか……」この本田の言葉で、

初めて村神は足を止めた。

村神は数秒足を止めていたが、また歩き始めた。

「だから、意味の分からないことを言うな。僕はいつだって、自分にも他人にも正直に生きてきたつもりだ。…それと、」

村神は一拍置いて、本田の方を振り返り、冷たい視線を送りながらこう言った。

「そんなことを気にするヒマがあったら、自分が凡人に負けたことをもつと深く考えたらどうだ。このままお前に変化が無いようなら、第1班班長の座を降ろすからな。最悪の場合、SACを辞めてもらう。…いいな？」

「…はい」

村神の足音が遠ざかり、静寂が訪れる。

「…噓、吐いてるじゃないですか」

「…そうですか、『木下京介』との接触に無事成功しましたか。そ

れはよかった。ご苦労様でした。では、引き続き二人には『木下京介』との共同捜査を命じます。二人とも、どうぞ頑張ってくださいね。期待していますよ、村神くん、本田くん」

「はいっ」「それと、第1班班長補佐から伝言を預かりました」「え…伝言ですか?」「申し訳ありませんっ。指令に伝言を頼むなどと…とんだご無礼を…。後ほど厳しく指導しておきます。どうかお許しください」

「いえいえ、いいんですよ。それより、その伝言の内容なんですが、大変興味深いものでしてね…」
指令は繭をひそめ、面白そうに顔を歪めた。

「それでっ、その内容って何なんですかつ?」「こら、本田っ! 指令だぞ慎め!」「村神くん、あまりカリカリしていると体が持ちませんよ。では伝言の内容ですが、」

指令が口にした第1班班長補佐の伝言は、村神と本田を震撼させるものだった。

『木下京介の通っている学校に、カラスがいます。自分はそいつを追います。お二人は木下京介とカラスの接触をさせないようお願いいたします』

「……では二人に改めまして、早急にカラスの発見と木下京介の護衛を命じます。同時に二つの指令を遂行するのは難しいと思います。が、必ず遂行してください。以上！」

「はいっ

」！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9054e/>

少年のおだやかな日々

2010年10月9日07時22分発行